

語学教師の「自己」を求めて

——その歴史と展望——

(3)

塩 田 勉

目 次

1. 中国語と禅僧たち
2. キリシタン語学の時代
イ、イエズス会の歴史的背景
ロ、イエズス会のラテン語教育の背景

1. 中国語と禅僧たち

前回の終りで述べたように、中国語の音読が次第に廃れて、訓読に移行したのは平安時代の末期であった。訓点の発生は、奈良時代末期迄遡り、備忘上の必要から、原文に万葉仮名で読み方を書き添えることから始まって、ヲコト点、返り点などが打たれるようになった。こうして成立した訓読は、口誦しやすく覚えやすい読み方を工夫することに集中された。「学令」によって、

凡そ学生は、先ず^{おくしやう}経の文読め。通熟して、然うして後に^{みな}義講へよ。

と定められ、暗誦主義が原則となり、訓読するようになってからも、口誦が重んじられたためである。

やがて遣唐使の廃止によって、中国語の源泉との接触を失なうと、漢学は古注を踏襲するようになり、ますます日本化された。この頃から「学令」に定められた大学寮の教官の採用も選抜制から世襲制に変わり、決まった氏

族の者だけが任命されるようになった。音読に代るべき訓読を確立するためそれぞれ工夫をこらしたのが清原、中原両家である。訓点の発明を家点として世襲し、漢学は、中国固有のコンテキストをはなれ、日本文化に同化していった。

こうした傾向は、宋との交易が盛んになる途しばらく続いた。その結果、中国の思想や中国語にうとくなり、昔のように生き生きとした理解が出来なくなっていた。慈円は、「愚管抄」の中で、

此末代ザマノ事ヲミルニ、……高キモ卑シキモ、僧ニモ俗ニモ、……僅^{わずか}に真名^{まな}ノ文字（漢字のこと）ヲバ読メドモ、又基義理（正しい筋道）ヲサトリ知レル人ハナシ。男ハ紀伝・明^{みこうぎよう}経ノ文ヲホカレドモ、ミシラザルガゴトシ。……日本紀（日本書紀のこと）以下律令^{うつりよう}ハ我国ノ事ナレドモ、今スコシ読ミトク人アリガタシ。

と嘆いている。つまり、慈円が生きた十二・三世紀のころの日本では、漢文が読めなくなっていたわけである。これは、当時の訓読法が、テキストに個別的な読みを与えていったために、もとの中国語のような普遍的な読み方が失なわれたためである。そのため字訓の固定などの努力が博士家の人々によってなされ改良も行なわれたが、虚詞などは読まずに置かれた（置き字）ため、中国音に従って全てを字音直読で読んでいた頃に比べ、原文も覚えにくくなり、原語のニュアンスも薄められるという欠陥が生じた。

こうした中国語離れを別の面から見れば、日本語の自覚と文化的ナショナリズムへの傾斜と受けとることもできる。慈円によれば、本来の日本語である「倭ト詞^{やまとことば}」は、漢字に書くこともできぬし、そうかといって仮名に書いても読みにくく、なんとも坐りの悪い言葉である。例えば、「はたと、むずと、しゃくと、どうと、きと、きよと」などといったオノマトペ的な

副詞がその類である。しかし、「アヤシノ夫、トノキ人」(上下貴賤)までこうした、切れば血の出るような生の日本語で、考えたり感じたりしているのであって、漢文で考えているわけではない。こういう言葉こそ、「日本国ノコトバノ本体ナルベケレ」というのである。(『愚管抄』巻第二および七)

慈円は、自国語のアイデンティティに対する自覚に立って、「愚管抄」を仮名文字で書いた。当時、中国語学力の質的低下と併行して、日本語への認識が深まっていることがそこから読みとれる。

外来文化の異化と同化は連関しながら進行すると前に書いたが、慈円が愚管抄を書いたころは、中国語との新しい接触への要求も高まっていたわけで、文化的ナショナリズムとは、うらはらに、中国文化の源泉に復帰しなければならぬという認識も進行しつつあった。

例えば道元は、十三世紀に、入宋したが、帰国して数年後に書いた「正法眼蔵」の『弁道話』では、

とふていはく、西天および神丹国は、人もとより質直なり。中華のしからしむるによりて、仏法を教化するに、いとはやく会入す。我朝は、むかしより人に仁智すくなくして、正種しやうしゆつもりがたし。

しめしていはく、いふがごとし。わがくにの人、いまだ仁智あまねからず。

と述べ、中国は文化の中心地であるから人倫的素養も高く、日本はまだ及ばないことを認めている。

語学の面でも、もう一度中国から学び直す必要があるという認識は、宋から禅僧の来日が増えるにつれますます高まっていた。十四世紀の終りから十五世紀にかけて、今まで置き字として読まなかった文字もできるだけ読むべきであると説く者も現われた。東福寺不二庵の開山で不二道人と称した岐陽がそれである。博士家の訓点は、硬直して衰微して行っただが、

禅僧たちの国では、中国から栄養を吸収して再び漢学が生まれ変わりつつあった。

日本の漢学は、音韻変化してゆく中国語を、いくつかのフェーズを置いて追いかけていたため、古来、呉音、漢音、唐音、宋音のような音韻の層序を認めることができる。そして当時は、アップ・トウ・デイトな中国音が入って来たのは日本の禅寺であった。「山門を出ずればここは日本なり」という句は、当時の禅寺の語学的雰囲気を与えている。

禅僧たちは、もう使われなくなった漢音を改め唐宋音による中国語を中国僧から学んだのである。禅寺の閉鎖性は、そこを一種の中国領土の「飛び地」(enclave) にさせた。禅寺の僧堂教育の規範となった「清規」^{しんぎ}には、特に唐宋音がよく保存されているし、禅寺では、「ウヤムヤ」とか、「挨拶」とか「出世」、「喫茶」、「玄関」などという当時の最新の中国語が日本語にとり入れられている。

日本僧の入宋と中国僧の来朝も季節風の存在を知った航海技術により、より安全に行なわれるようになった。平安時代にすでに、^{むようねん} 蒼然、^{じやくしやう} 寂照、^{じやうじん} 成尋などが入宋し、次いで、^{ちやうげん} 重源(1167)、^{くわあ} 栄西(1168, 1187)、^{しゆんじやう} 覚阿・金慶(1171)、^{しゆんじやう} 俊芿(1199)などのパイオニアの後、道元、明全の入宋(1223)があり(計三十七人が入宋「五山詩僧伝」)、その後、^{らんけいどうりゆう} 蘭溪道隆が北条時頼に招聘され(1226)て入朝後、宋や元から中国僧二十一人(「五山詩僧伝」)の来朝が約一世紀にわたって続いた。

しかしながら、コミュニケーション上の問題はかなりあったようで、平安時代のパイオニア達は、筆談でしか問答ができなかったと「宋史」は語っているし、来朝する中国僧も日本語の素養はゼロであったから、日本社会にとけ込めず、その態度を非礼呼ばわりされ、日本人僧の間では必ずしも喜ばれなかったようである。

^{どうりゆう} 道隆は、「日本語はほとんどできず、もっぱら中国語で説法した」といわれ、建長寺を開いたが、スパイの嫌疑をかけられたり、日蓮などに悪口

を言われたりしているし、兀庵^{ごつたん}は、不快な感情をいだいて帰国し、隠元も「礼法^{れいぽう}を識^しらず」とうとまれたと伝えられている。

しかし、これらは、禅宗の外部との対立であって、禅寺内部の子弟関係においては、おそらく中国僧と日本僧がかなり親しく接し、語学教育らしきものも行なわれたのではないかと想像される。

道元は、入宋前に「会話を習って」いたと言われるが、筆者の限られた調査では、誰からどのようにして習ったのかをつかむことは出来なかった。当時の語学教育そのものずばりを知る文献が見つけれなかったのが、情況証拠をいくつか上げて当時の語学教育を想像してみる他ないのだが、「大宝律令」の『僧尼令七』に、

凡そ僧は、近親郷里^{ごんしんきやうり}に、信心の童子^{どうじ}を取りて、供侍^{ぐじ}することを曉^{ゆる}せ。年十七に至りなば、各^{おののおの}本色^{ほんじき}に還^{かへ}せ。

とあって庶民を対象とした僧堂教育の一端がうかがえる。尾形裕康によれば、鎌倉から安土桃山にかけて、登山した少年は一七二人あり、七才ぐらいから約七年間、寺に寄宿在学したという。ここで教えられたのは、「千字文、百詠・蒙求、和漢朗詠」などである。しかしこれらが、宋音を知る僧によってどの程度直読式に教えられたのかは残念ながらはっきりしない。

一方、僧徒の養成を目標とした、禅林僧堂教育は、道元などの手によって開かれた。道元は、永平寺を開き、僧侶の学ぶべき宗教生活上の心得を細かく定めた「永平清規^{しんぎ}」を著わしたが、これにも語学教育としての中国語や漢学の学習については触れられていない。

ただ、当時の円覚寺や建長寺、南禅寺など、中国僧の居た禅寺も多かったから、そこで、ネイティブ・スピーカーから、中国語の生の語感や発音を摂取したことだけは確かで、それは、日本僧による、中国語作文としての五山文学という証拠として残っている。

どのような方法で語学教育が行われたかを、結果である五山文学から知ることにはできないが、五山に入門するときには、「禪宗が外来宗教でありかつ中国より学ぶものであったから、外国語の基本としての漢文学と、中国の状態を習得する必要上、禪寺への掛塔（かた——入門）には、作詩の試験を課して漢文学の力量を試験した」（玉村竹二）というから訓読だけではなく中国語の運用能力を前提とした学力達成を目指していたと見ることも出来よう。

事実、五山文学の執筆者には、^{がくいん} 悟隠、^{ぐちゆう} 愚中、^{けいあん} 桂菴、^{こうし} 翺之、^{こけい} 古劍、^{しざん} 此山、^{しいやくしつ} 寂室、^{しょうかい} 性海、^{ぜつがい} 絶海、^{せつそん} 雪村、^{ちゆうがん} 中巖、^{ちゆうじよ} 中恕、^{てつしゆう} 鉄舟、^{てんがん} 天岸、^{べつげん} 別源、など中国に長期間滞在した者の他、^{みんき} 明極のような中国人も入っている。

五山の文学活動は、五山版と称せられる、禪籍の印刷も行っており、ポルトガルトパドレたちの印刷したキリシタン版にも比べられるところがある。

以上のような情況証拠から、禪僧の間で中国語教育が行なわれ、それが一応実を結んだことはほぼ事実であろう。しかし、次の節で述べるキリシタン語学とは、根本的に異なる性格と限界を、禪林の語学教育が持っていたことも否めない。

禪林の中国語教育には、キリシタンの語学教育の特質であった、組織性、民衆の要求と生活に根ざした教育政策、言語干渉に対する認識、口語の重視などが欠けていた。一言で言えば、禪寺の語学には、大衆性が欠けていた。

これは、戦乱を逃れて文学や宗教へ逃避し更に日本迄亡命してきた中国人たちの持っていた反社会的、逃避的体質が、禪をとおして語学にも反映した結果である。この姿勢は、語学の対象を、総合的にすることを妨げ、専ら、政治社会に背を向け、文学宗教に限定する傾向を生み、閉鎖性を助長した。その端的な現われは、新しい儒教の摂取の仕方に見られる。

新儒教（朱子学）は、宋元文化のもう一つの側面として見落せない要素で

ある。朱子学は、「禅と対立し、禅に代って台頭し」社会や政治を中心に据えた。しかし、禅寺の中国語においては、朱子学は「固有の特質を活か」されず、それは、還俗して林羅山とともに、五山の禅学と対決し朱子学を唱えた藤原惺窩せいこを待たなければならなかった。つまり、彼によって、新しい中国語学の成果が、漢文の中に活かされたのである。羅山の「惺窩先生行状」(巻第四十、行状)によれば、

朝鮮刑部員外郎 姜沆けい ばんがうりょうしやうこう来りて赤松氏あきまつの家にあり。沆、先生に見えて日本国にこの人あるを喜び、俱に談ずること日あり。……

先生、赤松氏に勧めて、姜沆等十数輩をして四書五経を浄書せむ。先生、自ら程・朱の意に据りて、これが訓・点をなす。

とある。つまり外国人朱子学者姜沆との共同作業で、古注の誤りを二程子と朱子によって改め、アップ・トゥ・デイトなものに書き変えたのである。禅寺の外の博士家で行なわれていた日本化した中国語の矯正は、閉鎖的な禅林によっては果されず、還俗した惺窩によってなされたのである。つまり、禅のもたらした中国語学の成果を、禅寺の外へ持ち出したのが惺窩であったとも言えよう。

ただ禅宗語学のもう一つの面も把らえておく必要がある。相対的に見ると、門閥化した博士家の学問よりも、仏教の方に民間の俊秀が集まったのであり、生き活きたのは、官学の漢文よりも禅学の方であったわけで、それが硬直化した公家文化に新風をもたらしたことは否定できない。

しかしながら、その成果が、惺窩のような人間が出て来る迄は、万人のものにはならなかったし、政治に背を向け、朱子学のような政治と倫理を結ぶ考えかたは排斥された。また個人の救いに重点を置く禅は、組織的、社会的発想を持たなかったから、万人向きの語学教科書も生まれなかった。中国僧たちは庶民の間で説法してその悩みを直接に知ろうとすること

にも消極的であったから、口語に対する関心も少なく、熱心に日本語を学ぶ気運も生まれなかったし、言語干渉によって生じる教義の誤解に関する認識もなかった。したがって、五山文学の作文も、中国の官僚の文体である四六駢體に限られることになった。以前に比べ、感性面をも含む運用が多少進みながら、それは一定の文体に限定されていた。

ポルトガル人パドレたちも、ヨーロッパでは体制側に利用された右翼の会士であったが、日本に来て、中央政府とは必ずしも直結できないことを知ると、地方の大名および、その下の庶民と広汎な接触を持つようになり、日本文化に対する積極的な姿勢を確立した。そのため、パドレたちは、必死で日本庶民の口語を身につけ、イエズス会の教育組織に照して庶民の要求を入れた体系的な語学教育を行ない、キリスト教の教義が翻訳によって歪まぬよう細心の注意を払うなど、語学教育史上優れた成果と語学教師のアイデンティティ形成史の上での大きな足跡を残した。

2. キリシタン語学の時代

イ、イエズス会の歴史的背景

禅林における中国語学の教育法の実体があまりよくわからないのに比べ、十六・七世紀に主としてポルトガル人やスペイン人によって行なわれた、キリシタンの語学教育については、かなり詳しい記録や資料が残っている。これまであつかつて来た時期とは違って、キリシタン語学に関しては、著名な文献が多数出ているので、新しくつけ加えるべきものは素人の私にはあまりないが、キリシタン語学を、西洋の宗教史の中におけるイエズス会の位置、イエズス会のラテン語文典とヨーロッパの文法理論史との関係、ルネサンス・ヒューマニズムとイエズス会の教育法との関わりなどの点を大雑把ながら導入すること、日本における語学教師の「自己」形成の源流を温ねるという視点から、キリシタン語学を位置づけること、昭和八年に出た土井氏の論文以来ほとんど解明されていない、アルヴァレスの「ラテ

ン語文典の原典複製版が早稲田の図書館にあるのでそれについて、多少考察を試ることをこの章では行ないたい。

日本におけるキリシタン語学と云えばイエズス会の語学教育活動のことであるが、イエズス会の在日中の活動を理解する上で考慮に入れておかねばならないことがいくつかある。それは、宗教改革における新教と旧教との闘争において教育が争点となったこと、その背景には、教会の外で新興市民階級の教育を形成しようとする新教と教会内教育を建て直そうとする旧教との対立があり、それは、ヒューマニズム的な教育内容とスコラ的な教育内容、それに関連する文法観の違い、語学教育観の相違などを含んでいたことなどである。

新教は、旧教側の腐敗、特に下級僧侶が無智であったこと、ラテン語で聖書を独占して、一般庶民に母国語で読ませたことを禁じていたこと、スコラ哲学のわくに閉じこもり、現実の社会で役立ち、真理に基づく学問を疎外していることなどに強い不満を持ち、自分達の新しい教育の場を設立しようとしていた。

中世迄、教育は全く教会の独占事業であったのだが、十五世紀になると、市民層が教会の外で教育を行なうようになり、新教国では、修道院をつぶして、市民用の文法学校（シェイクスピアもその生徒であった）や大学を作る費用にあてた。長い間、教育を独占していた教会は、全く教育について反省する機会もなく、教育が僧侶以外の層にまで広がり、俗人も教育を必要としている時代になっていることを認識しようとはせず教育の改革は全く放置された。

旧教側は、自らの怠惰のため、新教側のエネルギーな教育活動によって、新教のイデオロギーの浸透がどんどん進み、足下が危なくなっていくことにやがて気付かざるを得なかった。

一五四五年～六三年のトリエント宗教会議では、こうした教育上の立ち遅れが問題になり、それを背景に、イグナチウス・ロヨラが脚光を浴びる

ことになった。と言うのは、ロヨラのイエズス会は、フレミッシュ・ブレゾリン・オブ・コモン・ライフという宗団を除いて、確固たる教育政策を持っている唯一の旧教団体であったからである。イエズス会は、自らを研修するために、整然とした教育体系を持っていた。それを拡大して、宗教イデオロギー教育に使えないかと、トレント宗教会議は考えたのである。つまり、新教側のイデオロギー攻勢に対して巻き返しを計るべく、ロヨラの教育手腕が買われたわけである。

こうしてローマ法王と結んだイエズス会は一五五六年のロヨラの死に至る迄千人以上に会員を増やし百に昇る支部を持つに至った。イエズス会は、十六世紀の新旧の宗教闘争の中で生まれた多くの新しい教団の一つであるが、抜きん出て勢力を得たわけは教育的力量の優位性に依っている。

中世迄は、教育と言えば、聖職者と学者のための教育を意味したが市民階級の成長と相俟ってルネサンス期には一般人も教育されるべきだという考えが広まって来た。しかし、その要求に応ずる一般人のための学校はイギリスのイートン校などを除いてまだ稀であった。イエズス会は、ここに眼をつけ、初等から高等迄の全課程の教育をセットにして諸侯に提供したのである。と同時に諸侯の告解を聴く勤めも果たした。

近世になってからは、教育は、国家の思想宣伝の強力な武器となり、いかなる国においても公教育は国家のイデオロギーに拘束されるというのが一般通念であるが、中世迄は教育は全く教会にまかされており、国家とは間接的な関係にあった。しかし、教会の勢力が衰えるにつれ、国家は教会を下に従えるようになり、教育が政府の事業に移されるようになった。イエズス会の活躍したルネサンス期は、教育が、教会から国家へ移る過渡期であった。封建諸侯は、教会を、庶民の霊の番人として把らえ、危険思想である新教を排除すべく、教会をとおして国家教育を行なおうとしたのである。

ロヨラのイエズス会は、こうした国家教育の後進性を背景に登場し、ブ

ロの思想教育集団として、教育の出前を行なった。その晩前は、高く評価され、封建諸侯は、こぞって領地にイエズス会のカトリック学校を設立し、プロテスタントの教員を国外に追放した。イエズス会は、こうして政治に巻きこまれていった。彼らは、ヨーロッパの君主たちと親しくなり、旧教の連盟国の中で C. I. A. ばりの政治活動も行なった。フランスでは、ユグノー弾圧の内乱を組織したし、イギリスでも新教のエリザベス女王暗殺を計ったりした。

以上がイエズス会が客観的に果たした役割であるが、主観的には、もう一つの側面があったことも見落せない。それは、イエズス会士たちの多くは、良心的な宗教家であったことである。少なくとも当初彼らの目的としたところは、貧しく病める者の救済であった。首長のロヨラが法王の権力と結びついて勢力を伸ばそうとしてから、イエズス会の運命は、会士の主観的意図とかかわりなく、反動勢力の延命の道具として利用され、その事態の展開の中で会士たちの意識も除々に変化して行き、結果的には、富める者、力ある者の味方に堕してしまうことになったのである。これは、自己が果している役割が客観的にどんな意味を持つか見ることの下手な文学者、宗教家、心情的で良心的な思想家や教祖型の指導者によく起ることで、そういう人たちを歴史的に評価しようとする場合、本人の意図に重きを置くか、その人間の果たした客観的役割の方に重きを置くかで評価がわかれてくる由縁である。本論は、両方を統一的に把える立場に立っている。

そこで次に、イエズス会士たちの主観的側面も考察しておきたい。彼らが、日本で良心的な教育を行ない、数十万人の信徒を階級を超えて獲得することが出来たのは、彼らの宗教的良心と努力に依るところが大きく、外国との交渉史の上で特に重要であるからである。

彼らの宗教的良心の象徴的表われは、ザビエルとヴァリニャーノによって代表される。ザビエル（原音シャヴィエル）は、一五四七年アラツカで初めて日本人アンジロー（あるいは弥次郎）と会い、アンジローの好学心に打

たれもし、日本人が皆同じような知識欲の強い民族ならば布教すべき最適の民族だという印象を得た。ザビエルは、その初心をすぐ実行に移した。アンジローから日本語の手ほどきを受け日本に渡る決意をしたのである。一五四九年十一月五日、ザビエルは、ゴアのサン・パウロのコレジョ（学林）のイルマンに長文の手紙を送り、日本の第一印象を次のように語っている。

我等が今日まで交際したる人（日本人のこと）は新発見地中最良なる者にして、異教徒中には日本人に優れたる者を見ること能はざるべしと思はる。

チースリク氏によれば、ザビエルは、日本人の短所をよく見抜きながら、文化的価値を尊重し、それに基づく布教計画を立てたと言う。ザビエルが高く評価したのは、日本の政治・社会制度が高度であったこと、学問的レベルが高く、足利学校や五山などに「大学」を持っていたこと、男女を問わずほとんど読み書きが出来、ヨーロッパの文盲率の高さに比べて驚くべきレベルの高さであったことの三点であった。

ザビエルは、この認識に立って、次のプランを立てた。日本の首都「ミヤコ」に入り、「王」にまず会って「上から下へ」の伝道をする。（これは、「王」に会えず、地方領主に働きかけることに変更。）

「大学」へ行き、ヨーロッパの大学からも教授を招き、日本の青年をヨーロッパへ留学させる。（これは失敗に終わった。）

聖書の翻訳をして、日本の宗教文学を興す。

ザビエルのこうした布教計画は、必ずしも実現されなかったが、彼は、一五五二年、ロヨラにあてた手紙の中で（村上訳では、そうはとれないが、チースリク訳によると）、「日本人だけが、自分の力でキリスト教を発展させるに適している」と信じて日本を去った。イエズス会の背景にあるポルトガ

ルや、後にはスペインの植民地拡大政策の観点とは別の次元からザビエルは日本を正確に見ている。ザビエルは、日本の文化的主体性を尊重し、布教活動の初期において、日本を独立した国として眺めているように思う。

同じ精神は、一五八三年に「日本諸事要録」を表わしたヴァリニャーノについても言える。彼は在日イエズス会宣教師の最高監督者であって日本へ三たび巡察師として来ている。ヴァリニャーノは、日本人が、「有能で秀でた理解力を有し」、「子供達は……ヨーロッパの子供達よりも、はるかに容易に、かつ短期間に我等の言葉で読み書きすることを覚え」、「我等ヨーロッパ人の間に見受けられる粗暴や無能力ということがなく」、「信じられないほど忍耐強く」、「交際において、はなはだ用意周到であり」、「服装、食事、その他の仕事のすべてにおいてきわめて清潔であり、美しく調和が保たれており」、「他のことでは我等に劣るが、結論的に言って日本人が優雅で礼儀正しく秀でた天性と理解力を有し、以上の点で我等を凌ぐほど優秀であることは否定できないところである。」と述べている。(第一章)

そして以上の認識から、

イエズス会に入る日本人を、あらゆる点でヨーロッパ人修道士と同様に待遇し、(第十六章)

ヨーロッパの諸条件や態度、行為によって彼等を導こうとはせずに、彼等の条件によって待遇することが必要である。だから……彼等を訓戒し誹責する場合にも、怒って礼を失した言葉で物を言うことを慎まなければならぬ。(第十八章)

と述べ具体的には、日本に則した生活態度として、「清潔、礼儀正しさ、威厳、愛情」を挙げている。(第二十三章)

また松田毅一氏によれば、ヴァリニャーノは、一五七九年の書簡の中で、日本を征服しようとするヨーロッパ植民勢力のあらゆる試みは、「軍事的には不可能」であり、「経済的には利益がない」と総長に報じていると言う。（『日本巡察記』解説）

もっともヴァリニャーノの以上のような態度は、当時日本に長くいた布教長カブラルを批判するというコンテキストで理解されねばならない。ヴァリニャーノは次の点についてカブラルを批判している。カブラルは、日本人を「黒人で低級な国民と呼び」、「ポルトガル人修道士とまったく異なっており扱い」、「日本の風習に順応」せず、「これを嘲笑し」、ヨーロッパ人との差をつけるため「ラテン語やポルトガル語を覚えることを許さず」、「神学校を作ることを決して許さ」ず、「（日本）語は『文法』によっては判らないものとし、十三か年を（日本で）過したがほとんど字ぼうとしなかった」と言う。

イエズス会の布教はこの結果壁にぶつかっていたのだが、ヴァリニャーノの報告はそれを打開する立場からなされたもので、あくまでも目的は布教にあり、根本には、日本人を宗教的に教化してやらなければならない態度に貫かれていたことも事実である。

しかし乍ら、日本人の独立を尊重し植民地主義とは一線を画した宗教的良心に基づいていたことも確かで、法王やポルトガルに対しては、日本の政治、経済、文化上の独立をヴァリニャーノは主張した。しかし、法王らは、日本を例外とせず、まだ日本人が聖職者になることも認めないで、植民地の一環に組み入れようとしたから、イエズス会士たちは、自ら貿易に手を染めて金のかかる日本の布教を支え、ヨーロッパ勢力や他の宗派を牽制し、日本を守ろうとしなければならなかった。ヴァリニャーノは、日本が第二のアステクやフィリピンになることを恐れ、「日本では仏教が分裂しているため信用を失っており、キリシタンは、イエズス会一本なので信用があるのだから、他の宗教が来ないようにすべきだ」と主張して、日本への

ヨーロッパ進出を宗教レベルに留めようと闘っている。しかしこのころになると、イエズス会は、日本での経済的利益を独占しているという印象を他宗団であるフランシスカンやドミニカンたちに与え孤立せざるを得なかった。実際には、イエズス会は布教の費用捻出に苦しんでいたのであるが、

こうして、イエズス会の主観的良心と、客観的政治的役割とのバランスが旧教他宗派やイエズス会に対立する新教の宣教師たちの割り込みと、その冒険主義的布教によって崩れ、日本政府にヨーロッパの植民地主義の意図が露わになってゆくと言戒心を持った日本政府によってキリシタンは弾圧されるようになるのである。

以上が、キリシタンの語学教育の背景的事情の素描であるが、それでは、具体的には、日本でどんな教育が行なわれたのかを、ヒューマニズムとヨーロッパ文法史の背景を混じえながら語ることにする。

ロ、イエズス会のラテン語教育の背景

先に述べたヴァリニャーノによって、日本人による日本人のための布教が説かれて以来日本人に対しては、聖書を理解するためのラテン語を、ヨーロッパ人には庶民の生の声に接するための日本語をそれぞれ教育する動きが具体化した。

ヴァリニャーノは、一五七九年に初めて来日し三年間日本に滞在したが、その間、カブラルの失政によって生じた好ましからざる状態を改善すべく、第一回布教協議会を開催した。更に、「日本布教長内規」と「神学校内規」を発令して学習体系の拡充化に努めた。一五八三年に著わした、「日本諸事要録」やこれらの発令書から、当時の語学教育計画をかなり詳しく知ることができる。語学教育に関する重要な部分に以下抜萃してみる。

「神学校生徒時間表」から。(一、二、省略)

三、六時から七時半頃まで勉強し、学課を覚える。幼少の者はラテン語の単語を学ぶ。

四、七時半から九時まで、ラテン語の教師のもとに行き、宿題（を見せ）、

暗誦したことを覚え、教師が読み聞かせることを聞く。その間下級生は宿題をしたり、先生から課せられたことをする。……

五、九時から十一時まで食事をし休養する。

六、十一時から二時まで、日本語の読み書きをする。すでにできる者は、

日本語の教師が課する日本文の書状を認める。その教師は、学課を訊ねたり、習字を修正したり、総てよく秩序立て、彼等が上達するようにする。

七、二時から三時まで、唱歌や楽器の演奏を練習し、残余の時間は休憩する。……

八、三時から四時半まで、生徒はふたたびラテン語の教師のもとへ行く。

教師はこの時に一つの文章を書かせ、彼等が進歩するのにもっとも適していると思われる、何か他の文章を朗読して聞かせる。教師は、より下級の者には、その間、良いと思われるラテン語の文章の読み書きをさせる。なお残る夕食前の半時間、すなわち五時頃までは自由時間とする。

九、五時から七時までに夕食をとり、休息する。

十、七時から八時まで、ラテン語を学ぶ学生のために復習が行なわれ、

下級生は、その間、日本文字、またはローマ字の学習、あるいはこの時間により適していると思われる他のことをする。

十一、八時に良心の糺明（反省）をし、ラウレンシオの連禱（夕べの祈り）をして直ちに就床。

十二、その週に祝日がない場合には、水曜日に二時間だけ日本語の読み書きをし、一時からは自由時間とする。……

十三、土曜日の午前中は、その週に学んだラテン語の復習に専念する。

（昼間の）食事後は二時間、日本語の読み書きをし、一時に学校が終る。

以下省略

「神学校の経営の方法から」

ラテン語、その他の学問は、……幼少時代から学習しなければそれらを習得することができない。

（日本の）子弟は……仏僧達の間で文字や日本風の躰けを学ぶのが習わしとなっている。……仏僧等を除外すると、教育者は誰もいなくなる。……我等の修院の中にも彼等の為の学校を設立することが必要となる。

これら神学校は少なくとも三種設立することが必要である。二種は子供達の為であり一種は成人の為のものである。……古典の教養 Humanidad と、多くの学識と共に、日本語、ラテン語の読み書きを教授せねばならぬ。……

子供の時代から優れた教養を体得させる為には、異教の詩や、シセロの文章によってラテン語を教授すべきではなく、悪徳を憎むキリスト教的徳操と宗教の優れた材料を記載している書籍に基づかねばならない。……この新らたに作製する書籍は、日本で印刷せねばならぬ。……

神学校は……ラテン語においても、日本語においても、優秀な教師を欠かさぬように（する）。……

「日本諸事要録」第十二章

『日本人の為の神学校の必要、並びにその経営の方法』より

ここで企画されているのは、一日四時間のハード・トレーニングの語学授業である。読み、書き、聞き、話すの四技能を総合的に教え、内容はキリスト教文献に集中した教理教育であることがわかる。つまり、ラテン語を教える目的は、布教にあり、あくまでも語学教育はキリスト教を理解させる手段であったことは明らかである。

こうして、ヴァリニャーノによって企画されたラテン語教育は一応軌道に乗った。カブラルの時代には、秘密保持のため禁止されていたヨーロッ

バ語教育が初めて組織的に行なわれたしたわけで、ヴァリニャーノの功績は極めて大きかったと言ってよかろう。キリシタン語学のもろもろの成果は、彼の立案がなければ生まれなかったかもしれないからである。

しかし、一五九〇年に再び来日したヴァリニャーノはラテン語教育を視察して、「今まで、彼らの何人もラテン語をほぼ解するという程度しか進歩しなかった」（要録追補第八、井手勝美訳）ことを見い出した。その原因は、年を経たキリシタン学習者は多忙で、記憶力も落ちていたこと、日本語とラテン語を同じ学校で教えると、どうしても日本語に熱が入り、ラテン語が軽視されたことなどにあった。ヴァリニャーノは、この点の改善に勤めた。

一五九三―一四年度の年報で、ゴメスは次のように報告している。（片岡千鶴子氏による）

今年はラテン語が今までセミナリヨで見られなかった程の進歩を見せました。今までは強制されてラテン語を勉強してただけで、生徒たちの関心はむしろ日本文学の方にありました。ラテン語と日本語の両方に優れている教師がなく、また初めのうちはラテン語が難しくてたいして進歩できなかったからです……

そして成功の原因として次の四点をあげている。

1. 教師の努力と熱意。
2. ラテン語を習得した修道士が、ラテン語の本を読んで、説教の取材をしているのを見て刺激を受けたこと。
3. 印刷機の導入（ヴァリニャーノによる）により書写の時間が省け、一層勉強を楽しくさせたこと。
4. 司教が日本に来るというニュースによって、日本人にも司祭叙階の可能性が開けたと希望を持ったこと。

しかしこの時から五年経ってヴェリニャーノ自身一六〇一年に(第三回在日中)書いた「日本キリスト教の起源と発展、並びに我が主のこの新しき教会に対する特別の恩寵についての第一巻」の中で、「日本人少年はベン習字以外、ヨーロッパ人少年よりも、ラテン語その他の学問に関し、早い進歩を示さなかった」(井手勝美)として、ラテン語教育の成果には否定的な評価を下している。

しかし、一六〇一年から、キリシタン学校が閉鎖される一六一四年までは、印刷機によって印刷されたテキストの整備と、一応日羅両語を身につけた教育経験者などを得て、更に進歩を見ることができた。

ディエゴ・結城、ペドロ・カスイ、ミゲル・メノエス、マルチノ・原、セバスチャン・木村、ロマン・西、コンスタンチーノ・ドウラードなどのラテン語をマスターした日本人たちは、キリシタン語学教育史の最後の段階になって現われている。ヴェリニャーノの最初の来日から一世代の時間が経っているわけで、やはり語学教育は、その効果が上るまで、長い時間と努力が必要であることが痛感される。

これらの日本人の中にはラテン語の教師となった人も多く、ラテン語で演説した原・マルチノやマカオのイエズス会セミナリヨの上長にまでなったコンスタンチン・ドウラードなどが居り、彼らの書いた立派な古典ラテン語の原稿が残っている。

以上が、日本における創成期のラテン語教育の歴史的推移の概略であるが、具体的には、どんな方法を用い、どんな教科書を使用したのでしょうか。

方法は、時間割からもわかるとうり反復による暗誦の他、作文、演説、語劇、音楽などによる多角的な方法がとられた。

ゴメスの一五九三―四の報告には、発表会で、

二人の生徒が、「武力は学問に優るか？」というテーマで(ラテン語で)討論を行ない、同じセミナリヨの生徒が審査委員を勤めてその審査を行

ないました。……さらに合唱や器楽の演奏などのいろいろの音楽の間奏が入って行事は盛大にそして大変立派に行なわれています。またナタラにも日本語の混ったラテン語の対話を行ないました。テーマは、「真の美と偽りの美」で大勢の生徒が出場しました。

とある。

また、演劇をとうして、ミステリヨ劇と呼ばれる聖書に取材した劇（「アダム、エワの墮落、ノアの箱船」など）をラテン語でやらせたが、それは、オルガンやクラボを伴う楽劇であつたらしい。イエズス会の劇は、ヨーロッパでも有名で、ロペ・デ・ウェガやカルデロンもそれから学んだと言われている。こうした語劇は、楽しく、子供たちに喜ばれた。日本で最初の視聴覚教育であつたと言ってよからう。

また、「キリシタン演劇の主題歌・讃美歌は、街行く異教徒たちによっても口ずさまれるほどであつたという」（海老沢有道）から、音楽をとうしてもかなりラテン語教育が行なわれたことも確かである。一五八一年の「日本年報」は次のように報告している。

彼等はまたオルガンで歌ふこと、クラボ Cravo を弾くことを学び、すでに相当なる合唱隊があつて、易々と正式のミサを歌ふことができる。

このような多角的な方法によって、幼年組には、ドチリナを暗記させ、少年組には、ラテン語の読み書きと更に文章論を教えた。ドチリナは翻訳も暗記させたらしく、漢文の音訓復読のような形で原文と翻訳を同時に覚え込ませたらしい。

ラテン語をマスターした日本人「同宿」やイルマンに対しては、司祭養成のために、ゴメスが一五九三年にラテン語で書いた、「神学綱要」（『天球論』、『アリストテレスの靈魂論三巻及び諸小篇綱要』、『日本人イエズス会士のため

のカトリック教理綱要』の三部から成る)、セルケイラの編んだ、「良心問題必携」、セルケイラ著「教会の秘蹟執行必携」、マヌエル・バレット編『旧・新約聖書、教会博士及び著名な哲学者の聖教精華』などが講義された。

この他に、「日本のカテキズモ」、ボニファシオ師の「デ・インスティツチオネ」、「日本人遣欧使節対話録」及び「キケロ演説集」などが印刷され、羅葡日対訳辞書やアルヴァレスの「ラテン語文典」などの語学学習書も用意された。

これらのテキストは、プラントよりは、アリストテレスやトマス・アクィナスなどに基礎を置くものであるが、それは、日本で行なわれたラテン語教育が、キリスト教的人文主義の右派のコンテキストに位置づけられることを示唆している。ルネサンスの人文主義者たちの多くは、自然と神の恩寵の関係をアリストテレスよりはプラトンの哲学で解決しようとした。ルネサンスの新プラトン主義によって、それ迄自然の外に超然と存在していた神が内在化され、ティリアードが「ルネサンスの世界像」で具体的に示した、神性が自然界の上から下までにじみわたっているような一元的世界像が成立した。こうした神と自然との連続性は、人間と神、人間と自然との間にも生き生きした関係を成り立たさせ、シェイクスピアなどに見られる「存在の鎖」(全ての事物が神によって結び合わされ照らし合っていること)に基づく、所謂ルネサンス的人間観が成立したのである。

この人文主義左派とも言える新プラトン主義に対して、一段古い考えの人文主義者たちは、アクィナスやアリストテレスに基づくスコラ哲学的要素を強く持っている。これは、神と自然を一元的にとらえず、自然は神によって、「画竜点睛」されると言った考えで、一応自然と神とを区別した考えである。新プラトン主義による世界観よりも、この考え方の方が、人間の存在は、謙虚なものになっており、神と自然と人間との安易な連続性は出て来にくい。

ところで、当時のイエズス会は思想的には、古い方の考えをまだ捨て切

っていなかったようである。一五五六年に百冊に近い蔵書を携えて来日したヌネスは、「プラトンの著作」ももたらしており、新プラトン主義も好まれていたことは疑いないが、イエズス会では、まだスコラ哲学が教えられていたし、キリシタン版のテキストの「フィデスの導師」(1592)やゴメスの「神学綱要」(1593-4)もアリストテレス哲学に基づくものである。

イエズス会は思想的には、中世的価値観を捨て切っていなかったが、行動の上では、他のヒューマニスト達に共通する側面も持っていた。

ルネサンスのヒューマニスト達は、新興市民階級に対する新しい教育の担い手であった。市民階級は、実用的な学問を求め、教育によって、少しでも上流社会に入りたいという情熱を持っていた。また、医学や司法分野、外交、王室、貴族、郷紳などの秘書、市役所の書記などは、市民階級の新しい就職口であったがこれらの職業は全てラテン語で書類を書いたり読んだりする技術と知識が必要であり、ラテン語への需要は急速に増大し、教会の外に文法学校が建てられたのである。

ヒューマニストたちは、こうした新しい教育上の要求に応える上で先進的な役割を果たした。彼らは、教育陶冶を通じて、人間を変えキリスト教内における新旧の対立を調和できるという理想主義に基づいて、教育を自己の使命だと考えた。この点で、イエズス会の教育への参加と関心が、時代の要請にのったものであり、それ故に勢力を伸したことは疑いない。イエズス会の教育方針は、「学習体系」(Ratio studiorum)に細かく決められており、ヴァリニャーノの「神学規定」などもこれを背景として書かれたものである。それによって、文法教育から神学教育までの計画が段階に応じて決まり、教育とそれ以外の指導の分業も定められ、時代の要求にぴったりの教育システムを備えることができた。この点イエズス会士の行動は、他のヒューマニストたちと軌を一にしている。

また、ヒューマニストたちは、ジャーナリストの走りでもあって、印刷術を背景に、読者大衆を意識してものを書く生活を送った最初の世代であ

った。例えば、エラスムスは、速筆で有名であったが、それは読者の反応に機敏に反応しつつ、印刷屋の一室で執筆したり校正したりしたためである。この意味でヒューマニストは最初のマスコミ文化人であったのだが、イエズス会士にも、この精神は受けつがれている。バードレたちは、日本に印刷機をもちこみ、日本のキリシタンたちに一番あった文典や、物語や、教理書を模索しつつ執筆しているのであって、読者の反応によって加筆するなど弾力的な対応をしている。

また、彼らのラテン語教育法も、ヒューマニストたちと同じものがある。市民の実用ラテン語教育を目指したヒューマニストたちは、正確さ、有弁さを第一の目的とし、それ故、暗記の模倣を重んじた。そしてこの目的に見合うためには、中世の論理学に偏した文法より、古典時代末期の伝統を引くドナートゥスやプリスキアンなどの、有弁術と意味を重んじた文典の方を重用したが、この点でも、イエズス会のラテン語教育はヒューマニストラテン語教育の伝統に入る。こうした人文主義ラテン語教育の表われとしてアルヴァレスの「ラテン語文典」も考えることができるのである。これについては、次の章であつかう。

以上のように、イエズス会のラテン語教育は、内容や思想においては中世的スコラ的なものを残しながら、教育の体系、文法の立て方、印刷術の応用などの方法技術面においては新しい人文主義的な要素を持っていたことになる。また日本におけるイエズス会の特殊性とも言うべきある種の大衆性、民主性もここに挙げられてよいものであるが、これは、この章の「結び」で述べることにする。

紙幅が尽きたので、この章は未完のまま筆を擱きイエズス会のラテン語教育のテキストであるアルヴァレスの文典の構造やそのヨーロッパ文法史の中での位置づけ、イエズス会における日本語教育、キリシタン語学が創り出した民衆的語学教師像、この時代の評価などは次回に譲りたい。